

氏 名	きのした たかし 木 下 孝 司
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 128 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	乳幼児期における自己と「心の理解」の発達

論文調査委員	(主 査) 教 授 子 安 増 生	助教授 齊 藤 智	助教授 遠 藤 利 彦
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、生後9カ月頃から5歳半過ぎまでの乳幼児期における「心の理解」の発生と展開を「自他の相互交渉を通じた自己の発達」という観点から明らかにしようとしたものである。論文は、3部10章から構成される。

第Ⅰ部(第1～5章)では、1～2歳児における「心の理解」の発生活起源と自己発達について、自他のコミュニケーションが先導する形で自己—他者という関係構造が形成され「心の理解」が発達するという理論的考察を行い、日誌記録に基づく縦断研究法によって仮説モデルを提案し、それを実験的方法で検証した。

第1章では、3歳未満における「心の理解」の起源について、モジュール説、理論説、シミュレーション説、相互主観性説という代表的な4つの説を取り上げて概観するとともに、「心の理解」の起源を考える上でこれまでの研究で欠落している「自己—他者の枠組」の成立過程について論じた。

第2章では、論者の二男の生育日誌の記録に基づく縦断的研究によって、9カ月～2歳における自己と「心の理解」の発達について仮説的モデルを提案した。9カ月頃から自他の分化が始まり、1歳前半では自他は意図をもつ行為主体として「同型」の存在として認識されているが、自他それぞれの意図が異なることを理解できるのは1歳後半であった。2歳前半では表象レベルで自他分化が進み、3歳頃までには自律した主体としての自己と他者が理解され始めた。また、1歳前半と2歳前半において、自他関係をめぐる矛盾と混乱が認められた。

第3～4章では、第2章で提案された仮説的モデルを検証する実験が行われた。特に、自他の意図がずれるミスコミュニケーションの状況を実験的に設定し、子どもがそれにどう応ずるかを調べて、自己と「心の理解」のあり方を検討した。

第3章では、実験者が子どもの要求伝達を意図的に無視する条件などを設定し、1歳半以降の子どもが他者の反応に応じて自身の要求伝達行動を調整することが可能であることを示した。

第4章では、両面に異なった絵が描いてあるカードを対象児と実験者の間でそれぞれ異なった面が見えるように置いてミスコミュニケーションを誘発させる実験を行った。2歳後半児は、実験者の発話を否定したり、実験者側のカード面を確認したりして、ミスコミュニケーション状況を修復することが認められた。

第5章では、以上の実証データに基づき、1歳半頃と2歳半頃の転換期を経て、自他の関係構造が変化し、それに伴い「心の理解」が開始されるプロセスをまとめ、本研究の成果を先行研究に関連づけて整理した。

第Ⅱ部(第6～9章)では、幼児期における自己と「心の理解」の展開として、「時間的拡張自己」の形成プロセスに着目した検討を行った。

第6章では、「心の理解」と時間的拡張自己の発達には関連性があることを種々の文献から考察し、時間的拡張自己の発達を測定する方法として、「遅延自己映像認知課題」の妥当性を理論的に検討した。

第7～8章では、第6章で提案した仮説を実験的に検証した。第7章では、3～5歳児を対象に、遅延自己映像認知課題を実施した。その結果、時間的視点を自覚した自己認知は4歳過ぎで可能となり、遅延自己映像認知課題と「心の理論」課題の間には有意な関連が認められた。

第8章では、「サリーはお見通し？」という課題を実施して予想外の他者の行動に関する理解を調べた。その結果、他者の誤った信念に関して、その判断理由を言語化できた者とできなかった者に分けると、前者は平均5歳半以降にみられた。また、「サリーはお見通し？」課題において、登場人物の信念が変化したことに関する理解は、通常の誤った信念課題よりも遅れ、5歳半以降に出現した。

第9章では、第Ⅱ部の研究をまとめ、「心の理解」と時間的拡張自己の発達において、4歳頃の変化に加えて、5歳半頃にも発達の転換点があることを示し、より複雑な再帰的自己理解が開始される可能性について考察した。

第Ⅲ部（終章）では、乳幼児期における自己と「心の理解」の発達に関して、生後9ヵ月から5歳半過ぎまでの時期を6つの段階に区分し、従来の発達理論との関連を説明する仮説的モデルを提案した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、3部10章から構成され、乳幼児期における自己と「心の理解」の発達過程を心理学的観察および実験を通じて解明しようとしたものである。

論者は、わが国において「心の理論」の発達の研究に最も早い時期から注目し実証的研究を行ってきたが、多くの研究において「心」というものが自明の存在として取り扱われることに疑問を呈し、心の存在論から問わなければならないと考えた。そのため、自己—他者という関係構造が形成されるクリティカルな時期である乳児期の1～2歳頃と、時間的拡張自己の発達において重要な転換点となる5歳半頃の2つの時期に着目して研究を行った。

論文の第Ⅰ部では、第1章において「心の理解」の起源についてモジュール説、理論説、シミュレーション説、相互主観性説という代表的な4つの説を取り上げて概観した後、乳児期の1～2歳児における「心の理解」の発生活動と自己の発達について、論者の二男の生育日誌記録に基づく縦断研究（第2章）によって仮説モデルを提案し、それを実験的方法で検証した（第3～4章）。

第2章の生育日誌記録に基づく縦断研究では、9ヵ月頃から自他の分化が始まり、1歳前半で他者が意図をもつ行為主体として自己と「同型」の存在として認識され始めるが、自他の意図が異なることを理解できるのは1歳後半であること、2歳前半で表象レベルでの自他分化が進み、3歳頃までには自律した主体としての自己と他者が理解され始めることが明らかにされた。

第3章では、玩具などの手渡しを求める子どもの要求伝達を実験者が無視するミスコミュニケーション状況を設定し、1歳半以降の子どもが他者の反応に応じて自身の要求伝達行動を調整することが可能であることを示した。

第4章では、両面に異なった絵が描いてあるカードを対象児と実験者の間で各々異なった面が見えるように置いてミスコミュニケーションを誘発する実験を行い、実験者の発言を否定したり、実験者側のカード面を確認したりして、ミスコミュニケーション状況を修復する2歳後半児の特徴を明らかにした。

第5章において、第Ⅰ部の1～2歳児研究の成果を先行研究に関連づけて整理した後、続く第Ⅱ部（第6～9章）では、幼児期における自己と「心の理解」の展開として、「時間的拡張自己」の形成プロセスに着目した検討を行った。

第6章において、時間的拡張自己を測定する方法としての遅延自己映像認知課題の妥当性を理論的に検討し、続く第7章では、3～5歳児を対象に、ビデオフィードバック技法を用いた遅延自己映像認知課題を実施した。その結果、時間的視点を自覚した自己認知は4歳頃から可能となり、遅延自己映像認知課題と「心の理論」の誤信念課題の間に有意な関連があることを見出している。

第8章は、「心の理論」の誤信念課題を進展させ、「他者の予想外の行動」についての理解を調べる実験を開発して実施し、課題の登場人物の信念が変化したことに関する理解は、通常の誤信念の理解よりも遅れ、5歳半以降であることを示した。

第9章では、第Ⅱ部のまとめとして5歳半頃の発達の転換点について考察した。

第Ⅲ部（終章）では、以上の研究結果を受けて、①表象レベルの自他関係、②時間的枠組みの発達、③自他同型性から自他個性への変化、という3つの観点から、乳幼児期における自己と「心の理解」についての発達モデルを提案した。

論者の研究の方法論上の特徴は、自他同型と考えることの矛盾やずれを子ども自身に認識させるため、子どもの要求伝達の無視、多義的図版の導入、ビデオによる自己像の遅延再生、登場人物の予想外の行動の提示など、子どもの考え方に揺さ

ぶりをかけ攪乱させることによって子どもの反応を引き出す巧みさにあり、この方法によって乳幼児の発達の新たな側面に光をあてることに成功した。

他方、他者理解の発達における記憶、言語、共感性などの役割については今後の検討課題として残され、また発達を支えるために周りの大人が与える「足場」の効果の実際についても大きな検討課題のままとなった。しかしながら、本論文を通じて、自己と「心の理解」に関して論者が子どもの新たな発達の特徴と発達過程を明らかにしたことは、教育認知心理学の発展に対する大きな貢献である。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成19年2月21日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。